

2024年度（令和6年度）学校評価自己評価表

福山市立精華中学校区	校番 15	福山市立精華中学校
最終更新日		2025 年（令和 7 年） 2 月 1 日

I 福山市	ミッション 福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。 ビジョン 「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。
-------	---

II 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容 ・児童生徒は、人のため・学校のため・地域のためにできることはないかと考え活動を工夫している。 ・小中9年の縦のつながりやかかわりを大切にしたい取組を継続していく。 ・子どもたちが主体性を発揮できるように教職員はPDCAサイクルの視点をもってマネジメントしてほしい。	児童生徒の現状 ・興味をもったことを探究したり、思いを実現させようと主体的に行動したりする姿が増えている。 ・自分の考えを持ち、積極的に話したり書いたりするなど、自己表現力の育成に引く続き取り組む。 ・人間関係の固定化やレジリエンスにややかけるところもある。	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”) めざす子ども像 (義務教育修了時の姿) 中学校区として統一した取組等	【知識・技能】【思考力・判断力・表現力】【主体的に学ぶ力】【自己形成力】 ・確かな学力を身につけ、自ら進路を切り拓く子ども ・自己肯定感が高く、社会に貢献できる子ども ・「主体的な学び」の授業づくりに取組み、学力の向上を図る。 ・「自己表現」「あいさつ」に取組み、自己肯定感の向上を図る。 ・「自分で選び・決める活動」に取組み、自己形成力の向上を図る。
--	---	--	--

III 自 校

ミッション 地域に愛着と誇りを持ち、生徒一人一人が主体的に学び、精華中で学んでよかったと誇れる学校				
学校教育目標 夢と志を持ち、社会に貢献できる生徒の育成				
現 状 <児童生徒> ・素直であり、校内や地域でのボランティア活動に積極的に参加している。 ・体育大会や文化祭等での行事では、生徒が主体的に活動できる。 ・人間関係が固定化し、人間関係の広がりや、新たな関係の構築が難しい。 <授業> ・まず、自分の考えを持つ取組により、表現することへの抵抗感は和らいできている。 ・話し合い活動で意見を交流することはできているが、内容が浅く、「深める」「広がる」ところまでには至っていない。 ・自ら考え学ぶ授業を、生徒と教師で創り上げるよう取り組んでいる。	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”) めざす子ども像	主体的に学ぶ力 1 年 日常生活や地域社会をよりよくするために、様々な情報の中から必要な情報を活かし、解決している。 2・3 年 生活や社会をよりよくするため、様々な情報を多面的・多角的な見方で分析し、課題を適切な方法で解決している。	思考力・判断力・表現力 日常生活や地域社会をよりよくするために、自分の考えや意見を話したり書いたりしている。 生活や社会をよりよくするため、様々な課題を見つけ、既習事項を活用して、自分の考えや意見を話す・書く等で表現している。	自己形成力 生活や社会をよりよくするため、相手の立場も思いやりながら目標を決めて、最後までやり遂げようとする。 誰に対しても思いやりの心を持ち、より高い目標を達成するために、相手の立場や考えを尊重しながら、粘り強く取り組み、やり抜いている。
	教科等 国語、社会、数学、理科、音楽、家庭、英語			
	研究 主題・内容等	自ら進んで考え、協働的に学びを深めながら、課題解決する授業の創造 ・生徒が「わかる」「できる」を実感できるための教材研究と授業実践 ・単元の中で、生徒自らが課題発見・解決できる過程のある授業を展開（考えてみたい、考えざるを得ない問いの工夫） ・個人思考の時間を確保（個人思考→話し合い活動→表現活動→個の振り返り）		
	めざす授業の姿	課題に対して、自ら進んで考え、仲間とともに、自分の考えを深めたり広げたりして、協働的に課題を解決していく、みんなが考える授業		

福山市立精華中学校

Ⅳ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

年 目	中期経営目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価（１０月１日）				最終評価（２月末）				
							□指標に係る 取組状況	□ 評価	達成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	□ 評価	達成 評価	総合 評価	改善方策
3	「主体的な学 び」の授業づ くりを進め て、学ぶ意欲 と学力を向 上させる。	★	継 続	主体的、・協働 的な学びを大切 にした授業づく りで学力を向上 させる。	・単元の中で、生徒 自らが課題発見・解 決できる場がある 授業を実践する。	・授業の中で「な ぜだろう」「やっ てみたい」と思っ ている生徒の割合 80% 以上	・授業の中で「な ぜだろう」「やっ てみたい」と思っ ている生徒の割合 85.6%。グループ 活動の際の発問を工夫し、意味のある話 し合いをさせる。 生徒の興味のあるこ とやキャラクターを 取り入れ、関心を持 たせる。	3	3	・生徒が「どうして だろう」と疑問を持 つような導入を心掛 ける。 ・実生活と関連のある 話題を取り上げて 導入で用いたり、問 題として問うたりす る。 ・生徒が主体的に授 業に参加するよう に、Student Teacher として導 入等を生徒とともに 行う。 ・授業の最後に生徒 に自分の言葉でアウト プットをさせる時間 を持つ。	・授業の中で「なぜだ ろう」「やってみ たい」と思っている 生徒の割合 77.6%。 ・ST タイムを取り入れ、 導入の工夫を全教科で行 った。 ・文章を集中して読み、 自分の力で問いを把握す る手立てを取り入れた。 ・アウトプットタイムを 授業の最後に取り入れ、 自分の言葉や自分の力で まとめができるように指 導した。 ・テストの思考力を問 う問題での無解答率 24%。	3	2	3	・生徒が主体的に授 業や問題に取り組む ことができるように 、導入や発問、授業 の形態を工夫する。
			継 続	読書活動に積極 的に取り組む生 徒を育成する。	・図書委員会を中 心に、校区や校内で おすめの本を紹介 しあう取組を充実 させる。	・読書の好きな生 徒の割合 80%以上 （前年 75%）	・読書が好きな生徒 の割合 61.4%。図 書委員会では「本の処 方箋」等の取組の工夫 を行っている。			・ブックトークや新 刊等の紹介等、図書 委員会を活用し、本 を手にする機会を増 やす。	・読書が好きな生徒の 割合 67.8%。 ・他校と本の紹介カード の交流を行った。 ・朝読書や昼読書の取組 を全クラスで徹底でき るようにした。 ・図書館で勉強をし たり、教科に関する本を置 いたりすることで、図書 館に足が向かうようにし た。				・他校との交流を継 続し、本を読むこと への興味付けを行っ たり、自分の言葉で 表現する力をつけて いったりする。
3	教 職 員 の 資 質・能力の向 上を図る	★	継 続	研修によって「学 び」への理解を深 め、子どもの学び を促す実践力を 高める。	・教科の本質や子 どもの姿に着目し た授業参観シート を作成し、授業参観 に取り組む。	・研修により新し い発見があったり、 研修で得た学びを 自分の授業へ取り 入れたりした教員 100%	・研修で得た学び を自分の授業へ取 り入れたりした教 員 80.0%。経験等 に応じた研修を奨 励し、校内授業参 観に取り組んだ。	3	2	・校外研修の奨励を 継続するとともに、 校内授業参観の参観 シートの助言等を直 接伝える場を設定す る。	・研修で得た学びを自 分の授業へ取り入れ たりした教員 90.0%。 ・校外研修を奨励す るとともに、校内授業 参観を行い、相互に授業 を観合うことを通して 授業力の向上に取り組 んだ。	3	2	3	・本年度の取組を継 続し、相互の授業を 参観し、助言できる 校内の風土を大切に しながら、経験等に 応じた研修を奨励し ていく。

			新規	学校における働き方改革の取組を推進する。	・アンケート調査等において、ICTを活用することで、業務の効率化を図る。	・「子どもが自ら学ぶ」授業づくりにあてて時間がある教員 80%以上（前年 65%） ・時間外在校等時間 45 時間以内の教員 90%以上（前年 84%）	・授業づくりにあてて時間がある教員 77.8%。ICTを活用しながら授業づくりの時間確保に努めたが、行事の取組等に時間を費やし、結果として授業づくりの時間確保が十分ではなかった。 ・時間外在校時間 45 時間以内の教職員 78.3%。個々の時間外在校時間を把握し、健康管理に努めたが、45 時間を超える教職員が固定化していた。	3	3	・ICTの活用を継続するとともに、2ヶ月先までの予定を示し、見通しを持ち、業務の優先順位や軽重を考慮することにより、授業づくりの時間確保に努める。 ・校務運営会議や学年会でお互いの業務内容を把握し、業務改善できることについて、考えを出し合い、業務改善を進める。	・授業づくりにあてて時間がある教員 70.0%。 ・ICTの活用や見通しを持たせること、業務の優先順位考えることに取組んだが、行事と共に部活動指導等に時間を費やし、授業づくりの時間確保が十分とはいえなかった。 ・時間外在校時間 45 時間以内の教職員 80.0%。 前期(4～7月：37 時間 20 分)と比較して後期(9～12月：31 時間 10 分)の全体の時間外在校時間は改善されたが、固定化した教職員の大きな改善につながりにくかった。	3	2	3	・ICTの利用や校務補助員の活用を図り、授業づくりに充てる時間を増やすための見直しをしている。 ・45 時間の取組が教職員の健康に繋がり、そのことが教育の質の向上に繋がるという意識を高め、上記の見直しを含め時間外在校時間の短縮を進めていく。
3	生徒の自己肯定感を高める		継続	生活習慣を確立し、自分から進んで行動する生徒を育成する。	・計画的にボランティア活動を実施し、活動後の感想などを通信や掲示等で発信して、評価していく。 ・生徒主体の学校行事、委員会活動、係活動を充実させる。	・ボランティアに参加した生徒 60%以上（前年 49%） ・やりがいや達成感を感じている生徒 90 %（前年 87%）	・ボランティアに参加した生徒 56.1%。生活委員会による文化祭でのボランティア活動の発表や朝会や放送での呼びかけなど積極的に取り組んだ。 ・やりがいや達成感を感じている生徒 87.8%。各行事及び委員会活動等において、生徒中心の取り組みを進めることができた。	3	3	・活動に対する生徒のモチベーションを向上させるために、清掃の成果や意見を発信する方法を多様化する。（ポスター展示、意見発表、活動の写真展示など） ・生徒会を中心に、より身近なテーマに焦点を当て、委員会や係活動で取り組む。（読書紹介、新行事の企画等）	・ボランティアに参加した生徒 54%。 ・実施する曜日を重ならないようにすらしたり、委員会の呼びかけなどにより、どの学年からも多くの参加が得られた。 ・やりがいや達成感を感じている生徒 89.7%。 ・今まで中止だった生徒会行事を実施できた。 ・各委員会による取り組みを一年間継続して進めることができた。	3	2	3	・清掃活動にとどまらず、生徒が興味を持てるようなテーマ（環境保護、地域貢献など）の活動を取り入れる。 ・自己肯定感を高めるために、参加型の活動を取り入れると同時に、活動後の振り返りの場を設け、生徒自身が学びや達成感を言語化できるようにする。

IV 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

[プロセス評価の評価基準]				[達成評価の評価基準]				[総合評価の評価基準]			
評点	評価基準			評点	評価基準			評点	評価基準		
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。			5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。			5	100%以上の達成度		
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。			4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。			4	80%以上100%未満の達成度		
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。			3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。			3	60%以上80%未満の達成度		
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。			2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。			2	40%以上60%未満の達成度		
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。			1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。			1	40%未満の達成度		
									十分に目標を達成できた。		
									概ね目標を達成できた。		
									ある程度目標を達成できた。		
									あまり目標を達成できなかった。		
									目標を達成できなかった。		